

「ツイている人」の 考え方



NEW MORALS

私たちは、
毎日どのような心で暮らし、
どのような心で
人に接しているでしょうか。
ニューモラルは、
人としての行いととも、
そのもととなる
心のあり方（心づかい・考え方）を
大切にするモラルです。

この小さな月刊誌
『ニューモラル』は、
創刊（昭和四十四年九月）以来、
心豊かな人生、楽しい家庭、
明るい職場、住みよい社会を
つくるための心づかいと行いの
あり方を提唱しています。

目次

「ツイている人」の考え方	3
心づかいQ&A	16
あなたからのおたより	18
「生涯学習セミナー」2月のご案内	20

もしも朝から晩まで、すべてのことが自分の思うように運んだとしたら、きっと「こう思うでしよう」。「今日はゼンとやるぞ」。

しかし実際は、そんな日はかりではありません。毎日の生活の中では、思うどおりにいかないこともあるものです。そんな「ツイてない」と感じる日を少なくするには、どうしたらよいのでしようか。心づかいの視点から考えてみましょう。

今年は絶対「いい年」に……

ゴォーン……。

町外れのお寺から、除夜の鐘が聞こえてきます。

「おばあちゃん、少し急ごうよ」

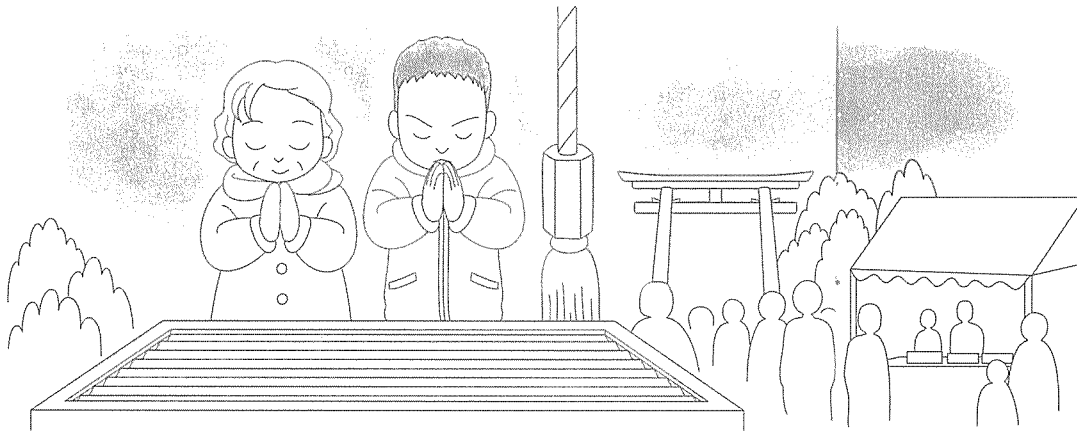
信司君（14歳）と祖母の敏子さん（72歳）が神社に着いたのは、新しい年を迎える少し前。鳥居をくぐったところでは、地域の人たちが甘酒をふるまっており、父親の健介さん（46歳）も手伝いをしています。

「早く家を出たのは、このためだったんだ。寒いのに、大変だなあ」

そんなことを思っていると、参拝の順番が回ってきました。お賽銭をあげて両手を合わせ、目を閉じると、この一年の学校での出来事や友だちの顔など、さまざまなことが浮かんできます。

「今年は絶対「いい年」になりますように」

思わず手に力がこもります。



お参りを終えて拝殿から離れると、敏子さんが尋ねてきました。

「ずいぶん一生懸命にお祈りしていたけれど、どうかしたのかい？」

「べ、べつに。それより、おばあちゃんは何をお願いしたの？」

「この一年も無事に過ごさせていただいて、ありがとうございます。あとは信司や家族のみんな、それから町の人たちも、元気で過ごせますようにってね」

「それだけ？」

敏子さんは、にっこりしました。

「おばあちゃんは、のんきだなあ。僕なんて去年が最悪だったから、少しでも運がよくなるようにと思ってお祈りしていたのに……」

「神様に『ニンジン食べれるようにしてください』って、お願いしたんでしょ」

千里ちゃんが、ちやかします。

「そんなじゃないって。だって、去年は本当に最悪だったんだから。野球部では練習中にけがをして、大会に出られなかったし、文化祭のときは話し合いがなかなかまとまらなくて、担当の僕だけが大変だった。なのに、文化祭からの流れで『三年生を送る会』の出し物も任せられちゃうし。しかも、二学期の終わりで転校していった友だちの代わりに美化委員もやらされることになって……」

そんな話をするうちに、やりたいことができなかった悔しさ、やりたくないことをしなければならぬつらさが思い出

ツイてな〜んと
ばかり？

一月三日は商店会の福引の日です。会場で、妹の千里ちゃん（9歳）や父親の健介さんと一緒に福引の順番を待っていると、健介さんが思い出したように言いました。

「そういえば、おばあちゃんが初詣のときの信司の様子を心配していたぞ。すぐ真剣な顔でお祈りをしていたって」

「そんなことないけど……」

されてくるのでした。

「それで『今年はいいい年にしてください』って、一生懸命お祈りしたわけか」

「だって、僕ばっかり損をしているみたいだし、ツイてないことばかりの一年なんて、もういやだもん」

信司君の言葉に、健介さんは少し間を置いて、話し始めました。

「……信司は初詣の日、どうして父さんが寒い中、甘酒を配っていたと思う？」
そう言われて、信司君はあの日、神社で見た、健介さんの生き生きとした様子を思い出しました。

「そういえば……お父さん、本当は寒いのが苦手なはずなのに。家でゆつくりしたいはずなのに、全然いやそうじゃなかつ

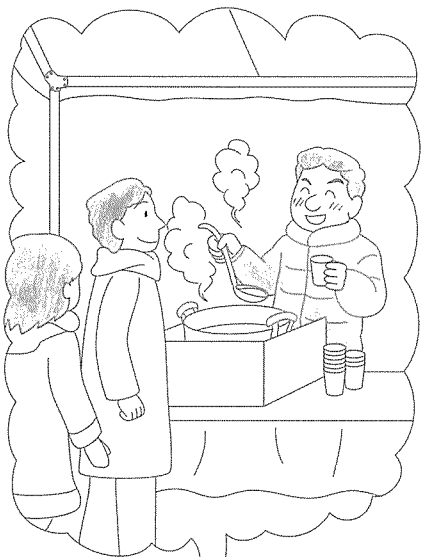
た。お正月からボランティアなんて、
いてない……って、僕なら思うのに」

「父さんも、若いころだったら、自分が
やらなくてもいいじゃないか」って、甘
酒当番を頼まれても断っていたと思うけ

どな」

意外な言葉に、信司君は思わず顔を上
げました。健介さんは続けます。

「実は昔、会社の先輩からこんなことを
教わったんだ」



むだなことは 何もない

それは健介さんが食品会社に入社し、
営業部員として二年目を迎えた冬のこと
でした。

「この冬も、付き合いの深いスーパーへ
試食販売の手伝いに行ってもらうから」

打ち合わせの際、課長はそう言うた、
健介さんのほか数人の名前を挙げました。
「えっ、また？」

その年の夏、さらには前年の夏にも同

じ仕事に当たった健介さんは、損な役ば
かり押し付けられている気がしました。

「若手でも全員行くわけじゃないのに、
僕はもう三回目。どうして……」

打ち合わせが終わると、健介さんは渡
辺主任のもとへ行き、疑問を口にしまし
た。渡辺主任は健介さんより十歳上で、
いつもユーモアたっぷりに指導をしてく
れる先輩です。しかし、このときは少
ばかり勝手が違いました。

「きみの思いはよく分かる。でも、意味
のない仕事やむだな仕事なんて、一つも
ないんだよ。例えば、きみがお手伝いに
行くスーパーはうちの上得意だけど、そ
うなるまでに先輩たちがどれだけ頑張っ
てきたか、考えたことがあるかい？」

健介さんは、ドキッとしました。

「自分のことばかり考えていると視野が狭くなって、仕事の喜びや楽しみも減ってしまふぞ」

そこまで話すと、渡辺主任はひと呼吸置いて、いつもの笑顔に戻りました。

「実はこれ、僕も十年前に課長から言われたことなただけだね」

*

耳を傾ける信司君に、健介さんはこう付け加えました。

「渡辺さんは尊敬する先輩だけど、そのときは素直に聞けなかったな。ただ、それからしばらくしてスーパーの試食販売に行っただけど、お店の人やお客さんの喜ぶ顔を見ていたら、なんだか楽しく

なってきた。もう『自分のことだけ』

は卒業しようと思うようになったんだ」

お父さんの仕事の話を聞くのは初めてだった信司君。「『自分のことだけ』は卒業」という言葉は、なんとなく心に残ったのでした。



おばあちゃんの笑顔の秘密

やがて三学期が始まりました。

始業式の翌日の放課後、信司君は同じクラスで美化委員を務める林さんから、委員の役割について説明を受けました。

「えっ、そんなことまでするの？」

「そうだよ。教室や学校の周りがきれいになつたら、気持ちがいいじゃない。私はテニス部でも週に二回、ゴミ拾いをしてるよ。野球部はやってないの？」

その質問には言葉を濁しつつ、こんな面倒なことを押し付けられるなんて、

やっぱりツイてない」と思った信司君。

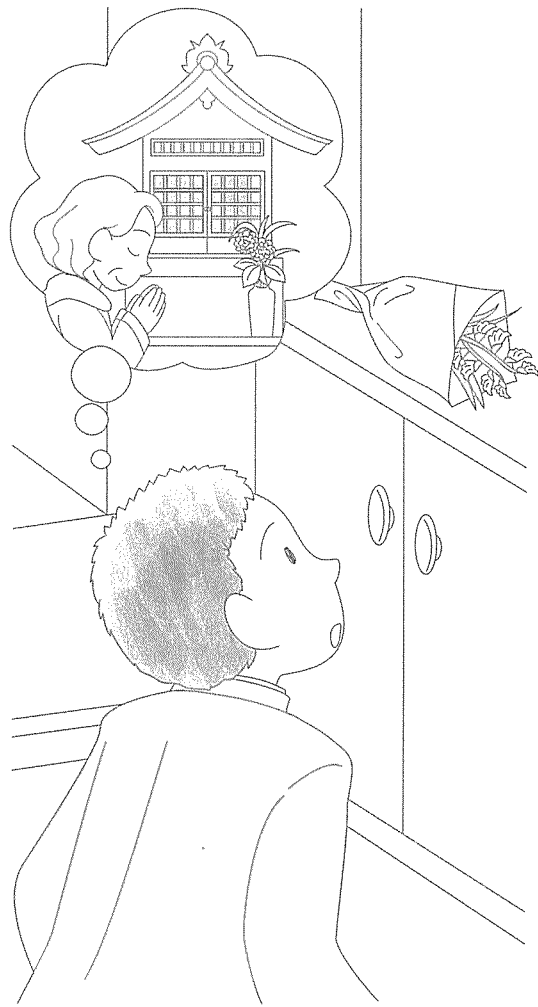
ため息をつきながら帰宅すると、玄関に花が置いてあることに気がつきました。家のすぐ裏のお宮に供えるため、敏子さんが用意したものです。

「そういえば……。おばあちゃんはいつもお宮の掃除をしているんだよな。誰かから「やりなさい」って言われたわけでもないのに、お花も替えに行くし……」

そのとき、ふと初詣のときの敏子さんの言葉がよみがえってきました。——無

事に過ぎさせていただいて、ありがとうございます
ございます。みんなが元気で過ごせます
ように……。

そこには、いつもニコニコしている敏
子さんの秘密が隠されているようにも思
えてきたのです。



周囲に 目を配ると……

翌日、信司君はいつもより二十分ほど
早く登校しました。

クラスのみんなは、まだ誰も来ていま
せん。信司君は自分の席にかばんを置く
と、教室内にゴミが落ちていないか、少
しだけ見て回ることになりました。

「おはよう」

次に教室に入ってきたのは、林さんで
した。ゴミを拾っている信司君に少し驚

いたようですが、「私はいつも黒板消し
がきれいになっているか、チェックする
んだ」と言つて、林さんも朝の日課に取
りかかります。ほんの数分の清掃活動を
終え、教室をあらためて見渡してみると、
思いのほかすがすがしい気分でした。

こうして、美化委員として教室内の様
子に目を配っていくと、「後ろの棚の荷
物、みんなで気をつければ棚から飛び出
なくてきれいなものな」「本棚が壊れそ
うだから、自分たちで直せるかどうか、
図書委員に相談してみよう」など、いろ
いろなことを考えるようになりました。

そして仲間と話し合いながら委員の仕
事に取り組むうちに、心配していた「三
年生を送る会」についても、みんなが少

しずつ意見をくれるようになったのです。
「なんだか最近、運が向いてきたような気がする」
そう思い始めた信司君でした。



心をプラスの 方向に向ける

人生には「ツイていないこと」も「ツイていること」も、入れ替わりながらやってくるものです。

思いどおりにいかないことは、誰にでもあります。では、自分のやりたいことができ、やりたくないことをしなくていい一日が「運のいい日」なのでしょうか。初めは美化委員になったことを「ツイてない」と思っていた信司君。ところ

が一步を踏み出してみると、委員の活動は「損なこと」でも「ツイていないこと」でもなくなっていたようです。美化委員であることに変わりはありません。信司君が「委員の活動の受けとめ方」を少し変えたことで、「ツイていないこと」が「ちよつと楽しみなこと」や「やりがいのあること」に変わり始めたからではないでしょうか。

「ツイてないな」「損ばかりだな」「面倒だな」と思えば思うほど、心は重く、後ろ向きになっていくものです。

そんなときは、自分を見つめ直すチャンスととらえてみてはどうでしょうか。人は誰しも、たくさんの人との関わりの中で生きています。「自分のことだけ」

から卒業して、広く大きな視点から物事を見つめ直していく。そうした心の習慣しゅうかんが「ツイている」と思える毎日をつくっていくのかもしれない。

